

◇園長室の窓から◇

渡辺茂

(+) プール

園長室のすぐ前がプールになっている。深さ四〇㌢、広さ一四㍍、プールサイドも一・五㍍ほどあり、シャワーも洗眼も完備。幼稚園としてはまあまあの方だと思う。三方をブロックで囲んであるのだが、その壁面を先生たちのアイディアと労作で素晴らしい海の生きものがえがかれている。鯨の親子が潮をぶいて泳いでいる。カニがはさまをぶり立てて遊んでいる。いろいろな魚がすいすい。砂地には貝類がそちこちに、本当に素晴らしい。

はじめ、プロに頼もうかという話も出たが、なんとか自分たちの手でやってみようと言うことになり、早速塗料や大小のハケを用意。全体の構想を全員が理解した上で、それぞれの分担に個性を生かして絵筆ならぬハケを揮いはじめる。ブロックの表面のアバタが塗料のノビを邪魔して大変手間どつたし、形や線がどうもうまく出せないが、でもさすがに幼児を扱いなれている先生方だ、夢のある楽しい海の生物がたちまちの中出来上がる。本当にうれしいことだ。子どもたちが来て、びっくりしたり喜んだりする姿を想像すると自然と顔がほころびてくる。

三年前のことだ。今じつとあの時のことを想い出して協力の素晴しさをぐっと味わっている。

(+) おでこおでこ

園長室の窓からやや斜めに園庭が見え、子どもたちの遊ぶ姿がよく目にはいる。仕事の手を休めて、何となくボカンとした気持で眺めていることがよくある。

言うも愚かなことだが、子どもたちはよく動く、実によく動く。ひとりとしてジックをしていない。こうした姿からはよくその子の本来の性格がそのまま出てくるもの。先生方はいつも子どもの中に入つて遊ぶばかりでなく、時には窓越しに子どもを眺め、そのナマの姿から指導のポイントを見い出すことも大変大事なことだと思う。

そんなことを考えていたら、比較的親分肌のA子が、おとなしいB子を前にして、自分の指示通りにいろいろとやらせているのが目にに入った。A子が「あたま」というとB子が頭へ手をやる。「かた」というと肩へ、「め」というと目に……というように、命令に服従させる快感を味わっているかのようだ。B子はおとなしくそれに応じている。

それを見ていてふと思いついたのが次の歌である。

早速子どもたちと歌つてみる。

「おでこ」という出だしの言葉に興味をそそられるらしく、笑い顔でいっしょに歌つてくれる。三回ですぐ覚える。そこで両手を使って動きを加える。

「おでこおでこ」……両手のひら

でおでこを

二回おさえ

る

「まゆげまゆげ」……両手一本指

を出してま

ゆげを二回

指す

「めめ」……同じように

して目を指

「はな」……指を鼻の頭

す

単純な遊びだが意外にのってきてくれる。氣をよくして、最後の「はな」を「みみ」に変えたり、「ほっぺ」に変えたりしてみた。結構楽しく続けられる。七小節の一拍休みに、「あいさせる場所」をタイミングよく指示しないと全体の拍の流れがく

渡辺茂詞曲

おでこ おでこ まゆげ まゆげ め め

ずれてしまふので注意が必要だと感じる。

はじめは先生がリーダーでやるが、少し慣れれば子どもたちでもやれる筈、リーダーの経験をさせるためにもこの歌は役立つぞと自画自讃。だんだんやっているうちに「でべそ」とか「おしり」なんかも出てくる。いやあ楽しい！

〔三〕 かたひじ

暇を見つけてはじっと子どもを見つめている。何か歌になるヒントはないかと……。そのままうとうと眠くなってしまうことが多いが、時にはポンと手を打つて目がキラキラかがやいてくるようなことにぶつかることもある。「しめた」と早速抽出しの五線紙を取出して書きはじめる。こういう時はイッシャセンリ、まことにすらすらと出でてくる。うれしい。幼稚園にいて本当によかつたなと思う。

なにしろ、実際の保育はベテランの先生方を中心に全員協力でやってくれるから、こっちの口出すものはない。

好きな「歌」でも作つていればいいのだから、なんと幸せなことか。それだけに「なんとか」していい歌を作つて子どものために役立たせなければ、いさきかボルテージが上がつてくる。

そこで出来上ったのがこの歌。

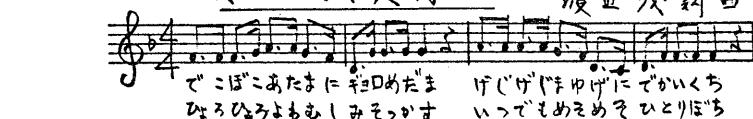
かたひじのうた 渡辺美・詞曲

The score is handwritten in black ink on white paper. The first staff starts with a treble clef, a common time signature, and a key signature of one sharp. The second staff starts with a bass clef, a common time signature, and a key signature of one sharp.

『おでこおでこ』の歌の発展として、やや高度になつてゐる。同じく名詞の連続だから、小生の代表作『たきび』の歌のような叙事詩的情的要素はない。その点ではムミカンソーだが肩からひじ、手首、手のひら、手の甲、指、つめとその順序を正確に覚えてスムーズに歌詞が流れることがねらいなのである。ぼやつとして人のマネばかりしている子はなかなか流れにのれない。「次は何」「次はどこ」とはつきり意識して歌うこととねらいたいもの。これは頃から、先生の話をしっかりと聞いて、それによつて行動する(マネで動くのではなく)という生活習慣を身につけるためにも役立つ歌であると、これまた自画自讃。

もちろん、身体表現を伴うこと

やーい ガキ大将 渡立券詞曲



指導する方がよさそう。ブンチャカという合の手も楽しい。
ひじ、手の甲の名称を知らない子が多い。「手首」のあとの一拍休みに「シャッシャッ」が自然に出てくるのも楽しみ。

四 ストレス解消

どんな学級にもガキ大将がいるし、いじめられつ子、めそめそ泣きつ子がいるものだ。いじめられたり泣かされたりはしないまでも、そのガキ大将に対しても何等かの心理的ウケツがある子が多い。

そうしたストレスを解消してやるために一つの方法として、みんなに「やーい ガキ大将」の歌をうたったことがある。これは可成り効果があつたようだ。一対一位を流れにのって表現するが、指導の順序としては前半後半と分けた。心ゆくまでうたう。

やーい やーい ガキ大将 よわいものいじめは やめろよな
のところは期せずして大声になる。弱者の悲しき叫びでもあるうか。しかし注意したいことは絶対に「ガキ大将」と目される個人を指さないことだ。

先生が小さいころの話として、いじめつ子ガキ大将のこわいのがいて、いつも何等かの抵抗を感じていたことを、例をあげて恐ろしげにまた楽しげに話をしてやつてみたら、この歌がぐーっと生きてくるだろう。

殆んどのおとな（性別関係なし）が、子どものころに経験しているであろうから、子どもたちへの話かけにはあまり難しさはないと思う。おもしろいことに、ガキ大将いじめつ子と目されている子どもでも、結構他のガキ大将いじめつ子にやられている場合が多いのだ。それだけにみんなでこの歌をうたう時、ガキ大将いじめつ子と目されている子ども自身が結構楽しんでいっしょになつてうたっているんだからほえましい。二番の歌詞は「弱むし、泣きむし、みそっかす」のような子を元にさせるためのもの。みんなで愛情こめて歌つてやりたい。（東京・弥生幼稚園）